

《平成 26 年度事業報告》

【1】基盤事業の実施

①芸術文化体験事業

年間を通して芸術鑑賞は 8 回実施しました。仙台市を含む被災 4 地区で実施した「杜の子まつり」の中で 4 作品 5 回、子育て応援フェスティバルⅦで 2 作品 2 回そしてみやぎ生協（敬称略）との子育て支援コラボ事業で行いました。杜の子まつりは 4 年間継続してきた被災地支援事業ですが、芸術鑑賞により子どもとその家族が感動を共有することで心を癒し明日への活力を得る事につながっていることが参加者の感想等から視えます。芸術に触れること自体が震災後の心のケアのひとつになっていると思います。

一方で、現状を客観的に捉えると、今年度も独立行政法人福祉医療機構と日本郵便株式会社年賀寄附金配分事業からの助成を受けて実施できたことについては、「一人でも多くの子どもたちに芸術鑑賞の機会を提供する」ことを目的に掲げている立場からすると、実施基盤が弱いということを認めざるを得ません。子どもにとってつくられた作品を公演するための資金調達をマネジメントとして捉え、具体的に行動していくことが、これからの重要課題であると思います。

②子どもの体験事業

小中学生が中心となって活動している人形劇サークル「ちょこタイム」は、仙台市男女共同参画フォーラムや学コミ「あそびの天国」への参加が恒例となってきました。学業が忙しくなかなか参加できない状況があり、新メンバーを募りサークルの存続を図りたい思いもあるようですが、メンバーが新作づくりにチャレンジするなど参画意欲は持続しています。

子育て応援フェスティバルⅦでは「かえっこバザール」の定着により、おもちゃの交換に自分の価値観を出す姿が多くなりました。オークションに対する意気込み、体験ブースに立ち寄り真剣に取り組む姿、スタッフとして働く姿は、子どもの参画意識が高まり、中高大学生のボランティアも含め、この場が異年齢の集いと参画の場になってきたという手応えを感じました。

ファミリー和太鼓ワークショップは、ほうねん座での稽古とみやぎのまつりで成果を発表できました。伝統芸能を通して、皆で創り上げる喜びや達成感を味わう、家族のきずなが深まった等の声をもらいました。参加応募が定員を上回ったこと、家族での参加が定着してきたこと、指定管理する児童館を利用する児童の参加が増えたこと等、参加者層の変化と広がりを感じました。

③子育て支援事業

ママパパライン仙台を開設して 10 年を迎えました。2004 年に全国 6 カ所でキャンペーンを展開し、2007 年にママパパライン仙台は常設となり現在に至っています。この間、実施総数 444 日で、かかってきた件数は 709 件となりました。本年度は、常設、全国キャンペーン、そして仙台が独自に行った「3.11 ささえダイヤル」を合わせ 61 日間で 83 件ありました。電話内容は、子どもの成長や自身の悩み等から震災後の生活状況や放射線量に対する不安等の電話で、乳幼児から小学生を持つ母親の電話が主でした。大震災後、相手に寄り添う傾聴に対するニーズが高くなっており、ママパパラインは長期にわたる心のケアに欠かせない支援になると思います。受け手の養成講座と自己研鑽は欠かすことのできな

い研修ですが、今回初めて金沢市で活動している団体「子ども夢フォーラム」が運営するチャイルドラインの現場を視察し、電話の受け手の傍にいる「支え手」の在り方等について学ぶことが出来ました。また、仙台独自で取り組んだ3.11 ささえダイヤルの実施に伴い、沿岸部への周知を広める努力をしました。受け手や支え手の交通費や養成講座講師への謝金、そして開設場所の手狭さなど運営上の課題は尽きず、助成金に頼っているのも現状です。

杜の子サロンは、今年6月より毎月第3木曜日の開催となりました。曜日の変動と会場がコンスタントに取れないこともありましたが、平均12組の親子が毎月サロンを利用しました。「ゆったり、ほっとできる場所」を心掛け、利用者に丁寧に寄り添うよう努めました。昨年度課題であったサロンを支えるスタッフや協力者不足は、学コミ等のネットワークを活かし、七北田地区の民生委員の協力を得ることが出来ました。サロンの利用者が地域で安心して暮らしていくために、地域のつながりをコーディネートすることもサロンならではの支援と感じました。長期にわたり専門家としてサロンを支えて頂いた海野京子さんに代わって、宮城県子育てサポートリーダーである岩住昭子当法人理事がサロンに携わることとなりました。

泉区子育て交流会「いずみん」、みやぎの区民協議会子育て支援部会への参画は、両区其々のニーズに合った子育て支援を行っていく上で、行政と諸団体が共に企画を計画し実行する貴重な市民協働の場に加わっていると言えます。親子が集うフェスティバルの開催、情報交換会や交流会を通して、孤立しない子育てや母親の社会参画を促す取り組みも出てきましたが、今後、行政の担当者が交代しても市民協働型子育て支援が持続可能なのか、winwinの関係は構築できるのかを鑑みると、今後の関わり方が大変重要になってくると思われます。

④指定管理事業

榴岡児童館は開館8年目、新田児童館は5年目の業務に入り、指定管理期間の最終年度を迎えました。両地区とも子育て世帯が増え続け、小学校も大規模化している現状がありますが、子どもの安全を図りながら地域で子どもを育てようとする地域力が非常に高いところです。その中で、両児童館共に小学校および地域との「顔が見える関係」が出来ました。両児童館とも児童館を知ってもらう努力を積み重ねたことで「地域の一員として」認めて頂いたと実感します。開館以来、両児童館とも地域連絡会を組織し、より良い児童館づくりへの意見やアドバイスを貰ってきましたが、児童クラブの大規模化に伴うサテライト室の開設や周辺道路の大規模工事に伴う利用者の安全キープについて等を率直に相談できる地域があることほど心強いことはないと感じます。

ひとり一人を大切に、相手に寄り添う、子どものほっとステーションを目指す運営を心掛けてきましたが、その成果として、子どもたちが自らやろうとする力が育ってきました。児童館まつりや子どもまつりで体験したスタッフとしての自負や達成感そして自信が次の活動に繋がっており、そのことは児童館が子どもたちにとって「やりたいことが出来る場所」になってきているからだと思います。子どもたちの持っている力を引き出すことは基より、その引き出し方が児童館現場と指定管理者側の双方に求められると思います。

今年4月の児童クラブ登録者数は榴岡102名、新田190名でスタートしましたが、児童クラブの大規模化傾向は両児童館とも当面続くと予想されます。新田児童館は館内に設置した分室の他、新田コミュニティセンター2階が第2分室となりました。地域の理解により行政側が分室の具体化ができたことと察します。厚生労働省より放課後児童健全育成事業に

ついて「新基準」が出されました。適切な規模での児童館運営について、地域・仙台市と共に児童受入れを検討していく場面が多くなることが予想されます。

仙台市内児童館連絡協議会では、6月に全指定管理者が協働し「仙台市まるごと児童館2014」を開催しました。1800名の来場者があったこと、指定管理団体を超えて若手職員を中心に実施内容を検討したこと、当日全員で子どもたちを迎えられたことが仙台市全児童館にとって大きな一歩となりました。福島市で行われた全国児童館大会で、仙児連が一分科会を担い、「市民協働の視点で児童館を考える」について発表しました。

尚、仙台市による行政評価は、両児童館ともS評価でした。

⑤ネットワーク事業

学びネットいずみ推進委員会、宮城野区民協議会、泉区ふるさとまつり実行委員会への参画はいずれも10年を超えました。男女共同参画推進フォーラムは時代の流れと共に名称が変化してきましたが、3劇場が合併する以前より参画し現在に至っています。

この間、せん杜は地域や仙台市内全体を視野に入れて行動する意識を持つことができ、諸団体や行政と共に協議し目的を達成することを繰り返すことで、社会性を身に付け多くのことを学ぶことができました。ミッションを実現するために、自ら社会とのつながりを求めたからこそ、ネットワークが広がり現在の事業遂行に活かされているのだと感じます。同時に、一つの団体だけでは達成出来ない子ども・子育て支援が大変多くなっている現状があり、一緒に行動することで社会の課題解決やコミュニティづくりを具体的に進めることが出来たと思います。また、子どもの放課後支援をすすめる会が、障害の有無に関らず子どもが安心して暮らせるコミュニティを目指すために、仙台市内の事業所の所在が分かるマップ作成に取り掛かりました。このネットワークは、「すべての子どもが子ども時代を豊かに過ごすことができる環境づくり」を共に進める存在になっていると思います。

【2】東日本大震災後の被災地支援

*「みんなつながれ！杜の子まつり」の実施

東日本大震災発災後から続けてきた「杜の子まつり」は4年目に入りました。石巻地区・東松島地区・仙台地区の他、新たに南三陸町志津川地区が加わり、震災後必要とされてきた「心のケア講座&サロン」も各地区内で行いました。被災者でもある支援者たちが「子どもたちの笑顔を取り戻すため」に強い意思を持って逆境に負けず頑張っている姿に、若い人たちに寄り添う力に圧倒されました。

南三陸町立戸倉小学校では、ぜひ観賞させたいという学校のニーズで「びりとブッチャーのクラウンショー」と放課後のあそび場をつくりました。毎日、各仮設住宅からバスで往復している児童たちが、短い放課後を震災後ずっと過ごしている現実を目の当たりにしました。東四郎丸地区では、障害の有無に関らず「どの子ども地域で当たり前暮らしているコミュニティづくり」を、子どもと大人が自ら地域のネットワークを深化させて取り組み、来年度も継続して実施していこうとする意気込みを感じました。

2月仙台で開催した「杜の子まつり」は稀に見る大雪に見舞われ参加者が前年の半数となりましたが、その状況にもかかわらず、子どもたちがおもちゃを持参しかえっこバザールを楽しみオークションに熱く参加したり、家族ぐるみで人形劇や体験ブースを楽しんでいました。体験ブースに協力して頂いた団体の方々、学生ボランティア、そして仙台市ジュニアリーダーと神戸から支援に訪れた高校生たちの姿がありました。まつり終了後行った

仙台と神戸の若者たちによる交流会では、震災から未来に向けて自分たちの出来ることを語り合いました。大雪による交通網遮断のため劇団が来仙出来ず、「ぼくらのロボット大作戦」を中止せざるを得なかったことは大変残念でした。

今年度初めて震災後の「心のケア」企画を5か所で、小児科医師である田澤雄作氏の協力を得て行いました。震災後更に増えたゲーム機依存や子育て中のスマホやタバコの影響などの養育環境から自己を回復するためには、「今こそ親子の触れ合い、眼差し、家族の絆が大切である」ことを、各会場ともお互いが膝を交えたサロンの雰囲気の中で話しました。

アートでつなぐ子どもの笑顔～まだまだ広がるつながりの輪～と題し25年度の総括である「フォーラムディスカッション」を2月23日に行いました。田澤雄作氏による基調講演、東松島市小野駅前仮設住宅自治会の皆さんとのトークセッション、参加者全員によるワールドカフェワークショップを通し、これまでの成果や課題、今後の支援について共有しました。

2014年4月以降の「杜の子まつり」は現在進行中ですが、このプロセスの中で、現地実行委員会へ石巻市教育委員会生涯学習課をはじめ石巻地区7団体が参画したこと、自らが当日の体験ブースを担ったこと、行政が管内全部の学校への広報周知に協力したこと、そして石巻地区および仙台のジュニアリーダーが子どもたちのプレリーダーとして活躍したこと、広渕小学校児童による縄跳びの披露が加わったこと等、現地と共に行動することで子どもたちが集い参画する場をつくっていかうとする共感や、一緒に子ども支援をしていかうとする意識が共有できつつあることを実感しました。

本事業は、独立行政法人福祉医療機構と日本郵便株式会社年賀寄附金配分事業からの助成を受けて実施出来ました。

***被災したママパパを受け止める傾聴電話事業「ママパパライン」**

本年2月10日から2月15日まで被災地3県と全国6ラインがキャンペーンを、3月10日から14日の5日間は仙台独自で「3.11 ささえダイヤル」を実施しました。

その中で、福島に父方実家のある母親が子どもへの放射線量に対する不安や周囲に気遣い帰省できずにいる姿も覗えました。9月には全国センター主催の研修が東京で開催され、支え手やスタッフとしてのスキルアップと全国の様子を知ることができました。一昨年、被災地で頑張っている団体として「川崎病の子どもを持つ親の会」より寄付を頂戴しましたが、今年度は会津子ども劇場が担う「ママパパライン福島」へつなぐコーディネートを当法人が担いました。

【3】子どものための舞台鑑賞を社会に支えて貰う取り組みと会員拡大

①子育て応援フェスティバルに向け行動する。

作年度、なぜ途中で資金調達が途絶えてしまったのかを検証し行動につなげていくことを具体的な指標として30万円を掲げ、理事や会員の枠から地域や社会で行動している方々にも参加してもらい、発想の視点を広げるために「プロジェクトチーム」を立ち上げました。何のために実施するのかを共有することから始め、企業やこれまで関係のあった商店等より協賛金や広告を集める事、そのための書類作成や事前アポイントメントを取ること、誰が行動するのか等を詰めていきました。行動した結果、28万5千円を調達することが出来ました。企業訪問し学んだことは、自分の言葉で実績を積み重ねてきたことや思いを伝える事でした。指定管理等を通して相手側がせん杜の姿勢を認めてくれたことも驚きでし

た。また、これまでのつながりを活用しきれていないことに気付かされました。せん杜の全体像を共有することなしで、社会から支援を得る行動は出来ない、社会から評価を受けることの意味を深く受け止める必要があると実感しました。

今年度の会員数は正会員 37 名、支援会員 78 名でした。任意団体からの会員層から思いに共感する支援層の増加傾向が続いています。具体的な指標をあげて会員拡大につなげることが出来ませんでした。

【4】理事会の強化

①中長期計画をつくる

②理事体制の検討

複数の事業が同時進行している状況で目の前にある事案を協議することで時間超過となってしまう理事会が続く、という昨年度の課題がありました。繁忙さは変わりませんが、事業を通して全体的に理事の強化は進んだと思います。

(特活) 杜の伝言板ゆるゆるの協力を得て「組織診断」を実施できました。ミッションの共有度、ぶれない活動の継続、スタッフの育成等を通して地域の中で信頼される団体となってきたとの診断結果が出ました。今後更に強化するために、①中長期計画の策定 ②理事会の役割明確化 ③持続可能な自主事業の開発 ④会員制度の見直しによる支援者の拡大 ⑤次世代育成、が外部評価として出されました。このことを受け、理事合宿を 2 回行いましたが、中長期計画は現在進行中の段階であり、理事体制の検討までには及びませんでした。

【5】指定管理の検討

* 榴岡児童館および新田児童館の指定管理への応募

榴岡児童館が 2 期 8 年、新田児童館が 1 期 5 年の指定管理最終年度となりました。

地域の一員として児童館が受け入れられ、小学校・地域との協働を基に取り組んできた児童館業務から、子どもや子育て中の親の参画意識、世代を超えた地域内交流の場としての役割を、児童館現場の職員と一緒にこれからの 5 年間を担うという思いを持って、仙台市児童館指定管理へ公募しました。

* 新規児童館等の指定管理の検討

新規児童館の建設等の状況を鑑み検討しましたが、今年度の公募は見送りました。

【6】次世代育成に関する人材育成事業

仙台市が推進する「25才までの自分づくり」に共感し、これからの社会を担う若者を応援し、その思いを地域社会で体験できる受け皿のひとつとして新規事業としてチャレンジしました。様々な分野で活躍中の大人や現場から身近に体験できる 6 回シリーズとして設定し、現在進行中です。第 1 回は、仙台市教育委員会でも自分づくり教育、学校支援地域本部事業や協働型学校評価に携わり仙台版「開かれた学校づくり、確かな学力向上」を推進し、現在は宮城教育大学教育復興支援センター副センター長である野澤令照氏による講座でスタートしました。自分づくり教育を通じた児童生徒の学び、それを支える社会や市民の役割も交え、これからの社会を担う参加者に思いを伝えました。